

■議 題 平成22年度 第1回 学校協議会

■開催日時 平成22年7月17日

■開催場所 本校 応接室

■出席者 〔委員〕 浅野 委員 入江 委員 柿原 委員 北浦 委員
芝井 委員 立石 委員 永田 委員 宮坂 委員
〔学校〕 松本(校長) 秋元(教頭) 梅谷(事務長)
山本(首席・学習指導室長) 堀(指導教諭・学校運営室長)
浅田(学年室長)

■資 料 「槻の木高校の成果・現状と今後を見据えて」

1. 委員紹介

今年度新たに、兵庫教育大学教授 浅野良一 氏、類設計室 永田剛 氏が協議委員として加わり、合わせて8名の委員が紹介された。

2. 事務局紹介

秋元教頭、以下6名の本校事務局員が紹介された。

3. 学校長挨拶

松本校長より、本会の趣旨及び目的についての説明があり、今年度の協議課題の重点について諮問された。

4. 座長選出

本校PTA現会長 北浦義己 委員を選出した。

5. テーマに関する協議

(1)学校からの説明と報告

～槻の木高校の成果・現状と今後を見据えて～

1) 槻の木の現状

2) 槻の木の問題点

3) 槻の木の敵

4) 槻の木はどこをめざすのか？

5) 一つの案として

(2) 質疑応答・協議

[浅野委員] 学力テストは、自作のもので実施しているのか。

[山本首席] 今のところ自作のテストではない。

[浅野委員] スペシャリストとは、「領域」のスペシャリストということか。

[山本首席] 「進路」のスペシャリストということだ。「受験は団体戦だ」など、ムードづくりのスペシャリストだ。

[入江委員] 企画・運営部隊と実行部隊との分離をくわしく知りたい。

[山本首席] 2人ペアで取り組むということだ。「企画者が実行者となる」という学校文化とは違ったものをいう。

[浅野委員] 提案のシステムはどうなっているのか。

[山本委員] 新規の取組は「企画委員会」で、取組の修正は「運営委員会」で議論する。

[松本校長] 学校運営室、学習指導室、生活指導室、学年室の各室・各課で会議をもち、室から運営委員会、そして、企画委員会へと懸案事項が流れる。

[芝井委員] 槻の木は「私立」のような学校だ。ただ、異動や勤務条件等には違いがあり、経験の継承には困難な面がある。所管する府教育委員会がそうならないと空洞化することが危ぶまれる。閉じられたものであれば建学以来のルールを外れることはないが。

これまでとは違った府立高校としてのこの8年間の実績は大きい。それらを「忘れない手立て」が必要だ。生徒や地域社会から発信するなど。

平準化を止める方法としては、ルールやシステムをつくることも考えられるが、「物語をつくる」ことが重要だ。この取組からこの実績が生まれたということが見えるように。また、アイデンティティにかかわるスローガンや行事をつくることも有効だ。

[秋元教頭] 本府の全体に関わることについては難しいが、決められた枠組みの中で本校においてできることについては努力したい。

8年間の実績については、その間に同様の態勢、同様の人材が支えてきたという事情に負うところが大きい。その分、後継が育ちにくいということにもなるのだが。

[芝井委員] 学校の進むべき方向に変容が認められる場合はPTAから指摘することも大切だ。

[入江委員] システム化することが重要だと思う。校長が替わると学校が変わると言うが、システム化が構築されて引き継がれると、変容が抑えられるだろう。

[宮坂委員] 報告2)の「槻の木の問題点」について、今、学校の多くが、「何かをすればいい」時代であるのが現状だ。この8年間に、他では成し得なかったこと、本校だからこそできたことがあるはずだ。それらを分析して精選することになるだろう。「強み」をさらに進めること、生徒第一に、何かをやめて「強み」をさらに特化することが必要だ。

「明確すぎる目標設定は必要か」については、進化し続けている槻の木だからこそ明確さは不要ではないか。期待の一步先を目標にすればよい。

先ほどの「物語をつくる」、それを語ることが一番の研修ではないか。

[浅野委員] システム・組織づくりが重要だ。進路指導のシステムとミドルリーダーの育

成を重ね合わせてシステム化することも有効だ。進路指導のシステムを生徒に依存したのではなく、戦略的に構築すべきだ。自校作成の実力テストをつくるなど、先生方の作問をコアにするのがよいと思う。ミドルリーダーの育成は、組織人としてのスペシャリティを育てることが重要だ。そのために、プロジェクトチームをつくったり、教師がチャレンジするシステムを構築することが有効だ。

[宮坂委員] 取り組んでほしいこととして、学力研究委員会はぜひともやってほしい。評定5、6、7と8、9、10とはあまり差がないにもかかわらず、複雑な思考と記述、社会科に差が出る。課題を分析して伸ばす指導が必要だ。子どもがすでに身につけている力を重ねて指導することはしない方がよい。その部分は捨てることだ。

[芝井委員] 建学のスローガンは何だったのか。学力や規範の問題もあるが、高槻の子どもが茨木の高校に進学するという現状から、きちんとした公立高校を高槻につくろうという目的があったのではなかったか。その旗印は可能な限り追求すべきだ。

大学への進学実績はもちろん大事だが、それが最終目標ではないはずだ。「人を育てる」ということだ。両立させねばならない。世界・社会の中でリーダーとなる人材を育てるということだ。プロジェクトなどで伝えていくことが必要だ。

[堀学校運営室長] 補講など特化した取組に対して後ろ向きなムードはもはや教員の中になくなってきている。頑張れば実績に結びつくことが分かってきたからだろう。

進路実績をつくることと人間を育てることとは相反するものではないと考えている。

[立石委員] 高槻市の中でもまだ槻の木高校の取組を知らない人がいる。卒業生や保護者からの発信を考えるべきではないか。

[永田委員] 塾の生徒の学校選びについて。今までは、偏差値などで序列化される中でトップを選んでいて。だから、危機感を煽れば勉強した。今は変化がうかがえる。校風や指導がしっかりしているかで選ぶ。子どもが課題に向かう集中力を高めている。学習する環境が整っている学校で勉強したいなど。学習モチベーション、社会的な目的意識を持ち始めている。目的達成のための学校選びが高校受験段階でもはっきりしてきた。

継承するものを精選することも大事だが、変化していくことにアンテナを立てることが重要だ。

[柿原委員] ミドルリーダーの育成について。企業の根幹は人づくりだ。槻の木の伝統を異動者に確認していく場をつくるべきだ。それをシステムとして行うのだ。自然と育っていくものではないか。育っていないと思いついていないだけではないのか。

槻の木を地域に発信していくべきだ。

6. 委員よりの提言

[浅野委員] 槻の木を発信する工夫と方策を探るべきだ。受験生への流れだけではなく、市民への発信だ。

[入江委員] ミドルリーダーの育成では、ノウハウの伝承が課題だ。中学校では30代、40代はいない。若い世代を主任にし、かつての主任がサポートする。実践を通じて学んでもらうのだ。

[柿原委員] 市民がまだまだ槻の木を知らないでいる。槻の木生も高槻について知らない。ぜひ発信してほしい。地元の起業家をを招いて授業などで交流できる機会をつくってほし

い。槻の木と地域との結びつきとなる。

〔北浦委員〕 P T Aにおいても、活動の目的と内容の継承が課題だ。子どもと先生だけで学校は成立しない。 P T Aも元気にならないとだめだ。

〔芝井委員〕 P R活動について。私学には広報部局がある。恒常的に情報を発信する組織をつくるべきだ。発信のアイデアが必要だ。

〔立石委員〕 研究を組織化して行うことについては、教職員が多忙になるのではないかと心配する。課題の選択や組織のつくり方に工夫してほしい。

〔永田委員〕 本校は恵まれた環境に立地している。それが実感できる取組が必要だ。学校や地域への帰属性を高めたい。

〔宮坂委員〕 リーダーの育成について。リーダーとなり得ない人とは当事者意識のない人だ。その人材の資質や能力を見極めることが大事だ。多様な仕事を課して、課題を自ら発見させる、そういう場をつくる必要がある。